

特253  
78

南學とその精神



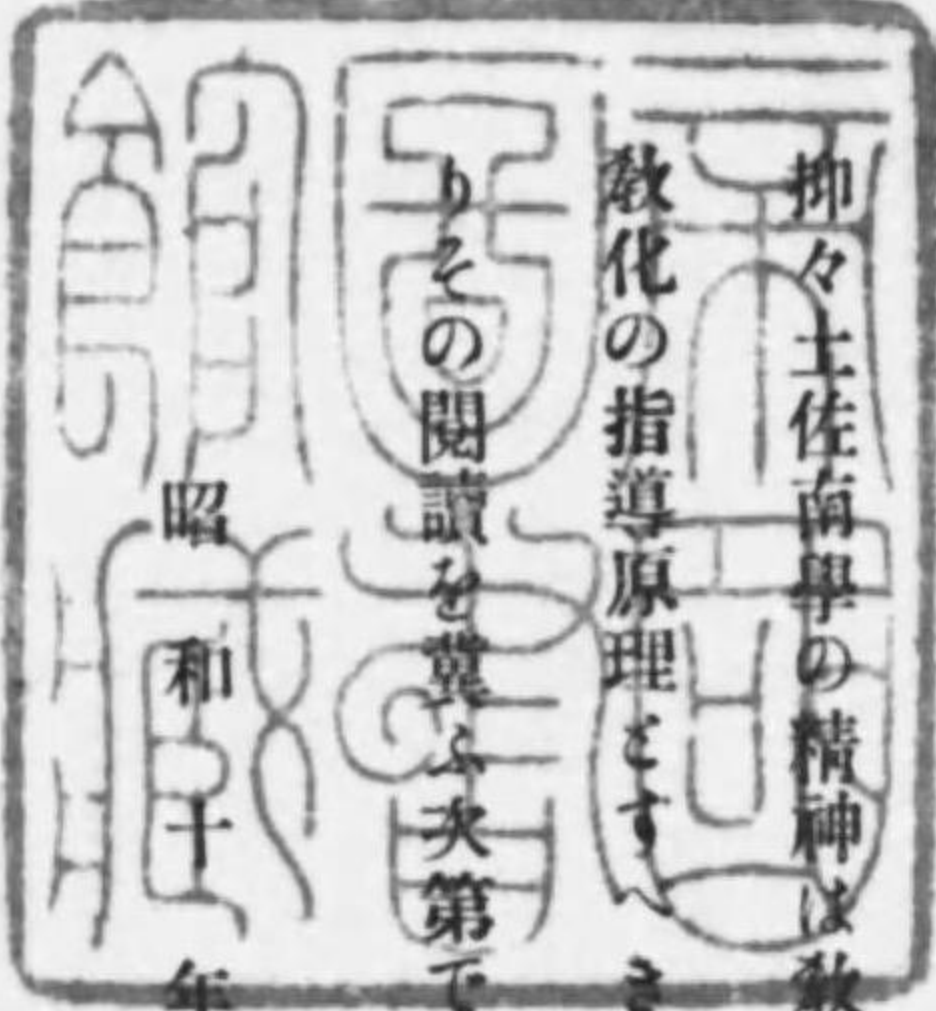
始



緒言

今夏畏くも 澄宮殿下には、勤王の歴史に輝く南國土佐路御巡遊の砌、高知市山内侯爵邸に於いて、高知縣立圖書館長中島鹿吉氏の『南學とその精神』と題する御進講を聽召された。この冊子は其の原稿である。

抑々土佐南學の精神は教育勅語の御趣旨に合致し、日本精神を強調し、吾郷土の誇たると共に本縣教育敎化の指導原理とす。まもの、此の非常時局打開の一指針であることを確信して、之を教育關係者に贈りその閲讀を冀ふ次第である。



昭和十年八月



高知縣學務部



## 南學とその精神

今から凡八百年前支那南宋の世に生れた朱子といふ人の學説には種々の特色がありますが特に大義名分を高調致しました所にその學問上の一大特色があつたのであります。此の朱子の學説が日本に將來されましたのは鎌倉時代の末期でありまして、始めてこれを宮中に御講義遊ばされたのが第九十六代後醍醐天皇であらせられます。天皇は御即位勿々宮中に玄慧法印を召され、藤原資朝同俊基等の有爲なる青年公卿と共に始めて朱子の新註に據つて學を講せられたのであります。その御講學の御様子を花園帝御宸記には「終夜必談之至曉鐘不怠倦」と明記されてありまして、夜を徹して君臣師弟が御講學遊ばされたその朱子學の大義名分論が建武中興の大理想を生み出し、御討幕の御氣象が振ひ起された一大原理であつたことを何人が疑ひ奉ることが出来ませうか。少くとも元弘建武の際に於ける王政復古の御運動に火を點じたものは此の宋儒の大義名分論であつたと拜察されるのであります。然るに天皇の王政復古の御運動が可惜中道にして挫けました所以は學問が宮中廷臣の間にのみ講せられたに止まつて國民大衆にその學問が及ばなかつた爲めでありまして、學問が興へられず、大義に關き國民大衆を以てして、多年日本の政權を壟斷せる強剛なる武家政治の顛覆を企て給へる所に天皇の御事業の御齟齬があつたのではないかと恐察し奉るのであります。千載稀なる御英資を以て事御志と違ひ給ひ

玉體は假令南山の苔に埋むといへども魂魄は正しく北闕の天を望まん」と仰せられました天皇御臨終の御無念を拜し奉る時誰か眈を決して悲憤せざるものがありませう。

然かも爾來五百年間闕として聲なく一人の義人の起つて御遺志を奉體することのなかつたのは何故でありませうか。天皇が御討幕の指導精神とせられた同じ朱子學は連綿として續いて居りますが、主として五山禪林の講學たるに止まつて未だ一般國民の手に届かなかつた故に、國民は名分の如何なるものたるを知らず大義の何物たるを辨せず、昏々として長夜の眠を續けて居たためであります。大事業の前に大理想なかるべからず、大理想の前に學藝復興なかるべからずと喝破致しました西洋哲人の言葉は此に移して以て永久の眞理たるを覺えるのであります。

然るに天皇の御崩御後百三十年にして應仁の亂が起りました京都の町は兵燹に罹り宮殿樓閣社寺邸宅一切を擧げて烏有に歸し七百年の帝都は畏れ多くも一朝にして燒野の原と化してしまひました。學者僧侶或は住むに家なく食ふに食なく書冊を抱いて地方豪族にたよつて四方に避難致して參りました。これがために在來卿紳僧侶に獨占されて居た京都の學問が地方に遷移する端緒となり日本文學史上吾日本思想史上の一大轉廻期を作る機縁となつたのであります。即ちこれに依つて七百年間京都の寶庫に封せられてゐました學問が始めて地方に遷移し、より剛健にして、より活力ある地方民衆の手に學問の渡る時が來たからであります。此の、民衆の手に學問が渡つたといふことは、何といふ素晴らしい尊い遺産の傳

達でありませう。嗚呼これが今二百年前に起つて居たならば千載の下國民をして涙を吞ましめる吉野朝の哀史もなかつた筈であります。

而して此京都から流れ出た學問が第一着に薩長土三國の岸に流れ寄つたといふことはまた何といふ素晴らしい計畫でありませう。神は選ばれたる民族に先づ學問の鍵を渡したのであります。而して此三國の人々は獨特の氣象を以て薩摩學、大内學、土佐南學といふ地方學を發達せしめこれに依つて大義を明かにし節義を磨き徐に國家有事の日に備へて居たのであります。そして四百年後、期せずして此の三國より幾多の志士が草莽の裡に崛起しまして、大義名分を眞向に振翳し尊王斥霸の大旗を掲げ手を把り肩を組んで幕末維新の舞臺に立ち現はれて參りましたことは何といふ感動的な光景であつたことでありませう。單にこれを歴史上偶然の一事象として看過するには餘りに嚴肅なる史實でありまして遼遠なる天祖の御神謨、後醍醐天皇御神靈の御導きと申上げる外に言葉を知らぬ神儼さに打たれるので御座います。京都の朱子學を土佐へ傳へましたのは周防大内氏の家臣といはれる南村梅軒であります。時恰も應仁亂後七十年の天文年間のことでありまして土佐七郡の山河には群雄割據し激烈なる鬭争を續けて居た戰國の眞最中でありませう。梅軒は弘岡の吉良峯城に乗込んで參りまして城主吉良宣經主従を前にして書を讀み學を講じ小は修身齊家の道より大は治國平天下の經綸に及び更に七書を講じて兵機を論じ高論四壁に振ひ意氣の颯爽たるものがあつたのであります。彼れが冲澹恬靜にして崇高なる風格と懇到にして熱

烈なる教育とは吉良城下の學徒の胸に焼き付く様な深い印象を與へたのでありました。此の梅軒が弘岡に於て講じました學問が南學の最初の源流でありまして後年天下に瀾漫致しました海南朱子學の發生當時の粗樸な姿であります。土佐人は此の原始的な弘岡の學問に彼等獨特の個性を以て血を注ぎ肉を盛り彼等土佐人の節義節操を織込んで渾然たる一大學風として成長せしめたものが世に所謂南學と申すものであります。城主の吉良宣經といふ人は源希義の後裔でありまして土佐戰國武將中稀に見る人格者であつて英雄にして聖人を兼ね所謂聖雄とも申すべき人であります。梅軒といひ宣經といひ斯かる千載會ひ難き優れた師弟が期せずして茲に廻り會ひましたことは土佐南學が將來發展する上に於て非常に幸福な出發點であつたと言ふべきであります。

宣經は不幸にして僅に三十八歳を以て陣中に歿し彼が懐いて居た中原の覇圖は空しき夢となり、續いて吉良峯城も滅びましたが、梅軒講學の精神は最もよくその落城の際に現はれたのであります。即ち忠臣出で節婦現れ義人立ち烈士起り悲壯極りなき點景を吉良落城史に留めたのであります。殊に火は既に城樓を呑む最後迄一人の難を免るゝものなく一族郎黨妻子眷族悉く城に殉じて壯烈なる最期を遂げて居るのであります。私共は土佐戰國史を讀んで此所に至りまして思はず卷を掩うて悲壯極りなき戰國吉良武士道のために悲涙に咽ばざるを得ないのであります。その由つて來る所を梅軒教學の感化影響に求めずして果して何所に求められませうか。實に此の壯烈な吉良武士道を作つたものは南學學風の力であ

つたのであります。吉良氏の滅亡と共に弘岡は一片の廢墟となりましたが火に焼くことの出来ない南學の精神と氣魄とは統一土佐の新しい主人である所の長宗我部元親の岡豊城に移つて行きましてこゝを第二の道場として更に一段の試鍊を受けることになつたのであります。

梅軒學徒たる吸江寺の忍性、宗安寺の如淵といふ二人の學問僧が元親の招聘を受けて月六回宛岡豊城下に於て學を講じ道を説き以て岡豊武士の氣節を砥礪いたしましたのであります。かくて南學は元親の峻烈なる氣象と豪邁なる氣宇と相俟つて昂乎として天下を睥睨する長宗我部武士道がこゝに鍛ひ出されたのであります。此の強健なる岡豊武士道を提げて元親は四國を討平し更に兵を大阪に進め秀吉を前に廻して天下の覇權を争はんとしたのであります。後に秀吉は聚落第に於て諸侯を會し元親に向つて「汝は四國を望みたるか、天下に心を懸けたるか」と問はれました時に元親は「何しに四國を望み候べき天下に心を懸け候」ときつぱりと答へて居ります。又太閤の命を受けて元親の長子信親が兵を率ゐて豊後に薩摩の島津氏と戦ひました時には所詮勝目のない戦争であるに拘はらず麾下三千の將兵一步も戦線を退かず勇躍して信親と共に屍を戸次川畔に横へたのであります。或は晩年長宗我部の相續問題起るや南學の學徒吉良親實等は堂々人倫の大道を以て抗辯論争して聊かも回避せず、甘んじて元親の下す斧鉞の下に斃れて居るのであります。かうした岡豊武士の遠大なる理想乃至は強靱なる氣魄節義といふものは抑々何によつてかく迄高く養はれたものでありませうか。少くとも南學がその重要な一原因であつたことを

何人も否定することは出来ないと思ふのであります。

かくの如く初期の南學の培ひ育てた勁烈なる武士道といふものは後年幾多忠臣烈士を土佐に生み出す機縁となりこれ等義人烈士の殉節と南學とは互に因となり果となり相織り相交錯して次第々に學問の内容を深めその色彩を強くして一歩々々土佐精神に喰ひ入つて參つたのであります。かうした學徒の血で書いた學問、かうした志士の魂を打ち込んだ學風、是が即ち南學の歴史的概念であります。弘岡にその源を發した南學は決して始めより坦々たる平原を快く流れたものではありません。或は山を越へ谷を潜り或は岩に咽び岸に哭し眞に崎嶇間關の間を苦吟難流致して居るのであります。

勿論儒學はその重點の置き所に依つて種々の學派に分れ得るのであります。或は訓詁の學風があり哲學的思索を主とするものがあり或はまた文藝的表現を喜ぶものもあり博宏にして考證を主とするものもあります。然るに我が南學はその何れにも與つては居ないのであります。人間行爲の準則とし人間の生活の指針にしよといふ唯一つの目的で書を読み義を講ずる學問であり聖賢の一言一句をそのまゝ人生の軌範とし修養の指針にしよといふ唯一つの目的の學問であります。つまり經書に誌された文字上の價值を其まゝ人間生活上の價值に實現しようとする嚴肅なる道義學であるのであります。

支那秦漢以來幾千年儒學の學風は幾度か變遷推移致しましたけれども土佐南學の如く文辭を説かず哲理を語らず直ちに孔孟の先蹤を踵がんとしてその間一髮の空隙を許さず一毫の妥協をも肯じなかつた嚴勵

剛毅な學風といふものは和漢を通じて未だ多く其の例がないと申し上げるも敢て過言でないかと考へられるのであります。これは全く土佐人の持つ素樸な實踐力といふものが新來の學問に働きかけた獨特の態度に外ならないと思ふのであります。これが實に初期南學の學問の本質と申し上げべきものであります。

慶長五年長宗我部は亡びまして土佐は新しく遠州掛川から山内一豊を迎へました。在來戰國武士を對象として參りました南學は是に於て平和時代に處する新しい内容を具へた學風へと轉回して參つたのであります。長濱雪蹊寺の僧天質の高弟谷時中がその重要な役割を演じた人であります。

在來南學は仁義忠孝といふ精神的道義の學でありまして經濟とか産業とかいつたやうな物質的方面は全然閑却されて居たのであります。寧ろかうした方面の事は南學の内容としては取扱はれて居なかつたのであります。時中の考では、平和時代の學問といふものは單なる精神主義ではいかぬ、在來の道義的學風に物質的經濟主義を織込んで利用厚生殖産興業といふ方面に發展をし以て物心兩面を掩有する學問に進展しなければならぬといふのであります。彼自ら僧侶でありながら海岸の埋立工事を致しまして數十町歩の新田を作り數百石の大地主になつて居るのであります。これは實にその學問上の主義主張を實際に移して實現したのに外ならないのであります。前申し上げました如く學行不二、體用一源といふ所が南學の重要な一特色であつたからであります。此の時中の經濟主義學風の感化を最も多く

受けその事業の跡を繼いだ者が門人野中兼山でありまして土佐藩政史上空前の經世事業として偉大なる發展を遂げたのであります。

八

時中の業蹟として次に申し上げべき事は師道の確立であります。夙に人々は君父の尊ぶべきは知つて居りましたが教師の重んずべきを知らなかつた當時でありまして況んや「君父と師は一である。俱に死を以て仕ふべきものだ」とは夢にも知らぬ時代であります。無位無祿の田舎寺の一僧侶たる時中が多数の官吏の上座に坐つて學を講ずるのが不都合だといふので抜刀して時中に斬りかかつて來たものがありました。した程師道に關しては無知な時代でありました。かかる時代に生れて來た時中は學問の權威、師道の尊嚴を確立するために、時には暴徒の白刃を潜り、時には藩主の權威に抗し、時には一藩の要人を呼捨てにして時人を覺醒せしめたのであります。時中の講席は極めて嚴重で「師弟の間宛然君臣の如し」と申されて居りますのは一に師道を嚴にして威武も屈する能はざる學問上の精神王國を建設せんとする意圖に外ならなかつたのであります。此の嚴格なる師道はその門弟の山崎闇齋に依つて繼承せられ南學の師道として廣く天下に範を垂れ得たのであります。六千人と稱せられる闇齋の弟子の一人々々に闇齋の魂が分ち與へられましたやうに、彼等の一人々々に時中の魂が分け與へられた筈であります。かくて熾烈なる時中精神は闇齋によつて廣く天下の教風を興し我國師風の骨格を作り上げたのであります。此の點に於きまして時中は日本教育史に特筆されてもよい人と思はるゝのであります。

時中の心臓の左右一つづつを分ち與へられた所謂時中門下の雙生兒とも申すべきは兼山と闇齋とであります。兼山は山内一門の門閥に生れまして二十二歳にして奉行に任じ爾來二十八年間、土佐藩政を獨宰致しまして空前絶後の經世の大手腕を振つた政治家であります。闇齋は兼山より三歳の年少で兼山就職の年に京都妙心寺から土佐の吸江寺へ轉住して參りまして偶然兼山と相識るやうになり相携へて時中の門下に參じ、その教育を受けるに至つたのであります。かくて兼山と比肩提携して學を講ずること八年學成つて後、京都に還つて私塾を開きましたので闇齋の學問といふものは實は土佐の學問でありその闇齋學派といひ崎門學派と呼ばれましたものは實は土佐南學の一分派に過ぎないのであります。殊に感激多い青年期に土佐に留學して居たために學問のみならずその性格氣質迄土佐人の感化を受ける所が最も多かつたのであります。その深遠なる學殖と卓抜の識見乃至嚴肅なる師道とを以て聲名群儒を壓し前後六千人の子弟を教育して天下の俊材多くその門下に育つといはれる迄に至つたのであります。殊に晩年垂加神道を編み出し滔々たる支那崇拜の儒學者中にあつて卓然として日本主義的な新學風を樹立するやその影響の及ぶ所或は水戸尊王論の淵源となり會津武士道の母胎となり更に王政維新の志士の魂に喰ひ入つてその思想的背景となつて非常に大きな影響を明治維新史に與へて居るのであります。茲に到つて南學は最早一藩一郷の學問に非ずして蔚然天下を掩ふ大學風となつて明治維新の大風雲を捲起したのであります。

九

一方兼山は奉行として二十八年間殆んど心血を濺いで土佐藩の土木交通殖産興業に大手腕を振ひ土佐經濟の大改革を成し遂げましたが、その仕事の跡を見ますと規模は遠大にして施設の永久なること、決して單なる土木技師の仕事でなく、事業師の事業でなく、胸中永遠なるものを見詰めて居る人でなくては出来ない仕事であります。物部川の井堰の出来上つた直後夜半俄に暴風雨の音に目醒めた兼山は衾を蹴つて一簣一笠を身に纏ひ馬を驅つて深夜物部河畔に立ち盡したといふが如き、或は室戸の築港に東郡に出張して連月歸らなかつた兼山の勞を慰せんとして藩主忠義はせめて一日の歸養をと勧めたけれども業成らすんば家に歸らすとて寢食を忘れてその事に當つたといふが如き、眞に民生を想ふ者に非ずしては到底出来ないと思ふのであります。かかる多忙なる經世濟民の事業に日夜奔走しながら、朝は四時に起き夜は十二時に寝ね閑暇を作つて闇齋等と學問經學の研究に没頭し更に學を書生に教授し、經書を蒐集し醜刻して之を童蒙に頒つて教化を布いたと言ふが如き誠人間業では出来ないと思ふ程の仕事をしたのであります。殊に儒葬を用ひて火葬を禁じ棺槨を廣くして葬禮を厚くし飲酒を制限して舞踊を禁じ以て風俗を匡正致しましたやうな事は單に兼山の一善一行に非ずして前人の未だ試みなかつた儒教主義の道德國家建設の意圖を懷いた遠大なる理想的政治家であつた證據かと思ふのであります。これ等百般の兼山の全事業系統の根柢を爲すものは實に彼れの學問でありまして彼れが學ぶ所の南學精神の顯現に外ならないのであります。唯闇齋の場合に於てはそれが道義道德の方面に表はれ兼山の場合には經世

の事業として現はれた相違があるに過ぎないのであります。かくて彼が二十八年間營々として努力した土佐藩經濟の立直しは決して一土佐藩の盛衰に關するものではありません。兼山の培うた富源、兼山の蓄積した資財といふものが幕末維新の際土佐藩をして思ふまゝ大義大節を天下に伸べしめる經濟的原因となつて居るのであります。これが即ち兼山の事業が普通の事業家の事業と異なる所以であるのであります。然し彼は遂に理想主義者の飲むべき杯を飲み干し、古來の哲人の如く悲惨なる運命の下に世を去つたのであります。彼が口癖に申して居た所の「假令百迄生きるとも後の人に想出される仕事を成さずは長生の甲斐なし」と言つた自己の人生觀に殉じたのでありまして地下の兼山亦恨みる所はないかと存する次第であります。

兼山の死後南學學者は未曾有の迫害を受けて政治界より一掃せられ哲人政治は挫折し更に學徒を國外に放逐して所謂南學一空の時代を現出致しまして土佐は再び學問なき闇黒の時代に戻つたのであります。然るに谷干城五代の祖たる谷秦山が此闇黒の土佐の曠野に生み落されまして健氣にも學問再建の鍬を把つたのであります。彼は少時京都に出でて闇齋に師事して所謂闇齋學の全貌を携へて土佐へ歸來し闇黒なる土佐學界の一角に學問復興の叫を上げたのであります。土佐に育つて土佐を出た闇齋の學問は泰山に依つて再び土佐に戻つたのであります。彼れの學問は神道、國典の如き皇朝の學を中心としまして儒學、天文、曆術をその雙翼とせる日本主義の學風であります。而して彼れは非常な情熱と信念とを以て此



の學風を開拓宣揚致しました。彼は申しました。「今日學者悉く天下の書を讀み盡く天下の理を窮むと雖も、我が神聖相傳の道に茫乎として聞なくなれば、義理の大、心術の微に於て大缺闕といふべく人の臣子として君臣旨決の要を知る能はずんば此豈學と言ふべけんや」と。また「本朝の武士内に感慨奮發の氣ありと雖も志大義に根ざさず、學、名分を講せず、古今惜しむべきもの擧げて數ふべからず」とも申したのであります。殊に最後の言葉などは二百年の年月を飛び越えて直に幕末の勤王志士の胸に迫る程の痛切なる言葉であります。江戸開府後僅に百年。元祿の盛世にも入らざる前に秦山の胸中既に討幕の士氣が藏せられて居たのではなかつたのでせうか。當時猶ほ封建道德の域を脱せざる土佐學界に秦山山房から放つた此國體主義の巨彈は確かに空谷の梵音でありましてこれが實に秦山教學の本旨であり同時に土佐勤王志士の魂の遼遠なる淵源であつたのであります。即ち彼は日本國體の神聖尊嚴なる所以を闡明し和漢國體の本づく所を辨別して偏に國家主義の學風を高調し、内に王霸の異同を辨じて臣子の名分を正しくすることを學問の本體と致したのであります。彼の五十六年の生涯は實にこの皇朝の學問を土佐學界に宣言せんがために生れ來つた一代でありました。明治維新史を編むべき土佐後進の青年達に皇國精神を鼓吹せんが爲めに神の下し給うた秦山であつたのであります。元祿十年十二月彼が秦泉寺の一隅に於て始めて門弟に講じた日本神代卷の講筵は實に土佐に於ける皇學宣布の第一聲でありまして谷門の子弟連綿相傳誦し爾來幕末に至る迄二百年間土佐教學の根軸となり來つたのであります。永い輝かし

い傳統と強烈なる武士道的試鍊とを経て來た南學は秦山に至つて狭い封建の扉を超えて直に天皇に奉仕する大義名分の學となり一藩一郷の領域を徹して直に日本國家に捧げんとする護國の氣魄となつて始めて日本精神に合流することが出來たのであります。

更に幕末維新の際におきまして土佐青年志士が草莽の間に起つて、よく秦山教學の生命を傳へ微力を國家に捧げて王政復古の運動に參じ之を實行に移したのであります。而して四百年前大義名分の學問を吾が土佐に送り給うた神謨に對へ以て聊か後醍醐天皇の御神靈を慰め奉ることが出來始めて南學發生當初の使命に酬いることが出來た次第であります。かくて土佐人が三千年來の皇恩の万一に對へ奉ることを得し幸福を思ふにつけまして武市半平太坂本龍馬中岡慎太郎始め幾多明治維新志士の靈を想ふと共に幾百年來此學風を開拓して報國の訓を郷黨に布き殉國の意氣を子弟に鼓吹致しました南學先覺の業蹟を追懷せざるを得ないのであります。

天保十一年十一月光格上皇御崩御あらせられ、その年の十二月廿日に御大葬をとり行はせられました。京都の武家屋敷には平年と同様門松を立て、注連繩を張り新春の設けに忙しくて御諒闇の悲しみは更に見られなかつたのであります。時に京都の土佐屋敷に柴田勝世といふ士が此の不謹慎に憤慨して薩摩屋敷に同役の山田清安を訪ねて意中を打明けました所が、清安は非常に賛成致しまして二人で京都中の武家屋敷を廻つてその不謹慎を責めて門松の撤廢を迫つた所が、九人だけが同意して門松を撤して哀悼の

意を表することになりました。所が時の京都の町奉行岡部駿河守より不審を受けて取調べられ勝世、清安の二人は極力その趣旨を辯明しましたが岡部駿河守は何としても合點が行きません。その中此事が天聽に達して門松を撤廢した九人に對して長くも御感狀が下りました。そこで柴田、山田の二人は之を代表してお禮のために參内し一首の和歌を奉つて御奉答致して參りました。その柴田勝世の奉つた和歌と申すのは

雲井まで響きける哉蘆田鶴の蘆間がくれに鳴きし一聲

といふのであります。此の柴田の奉答歌こそ土佐人が三千年來申し上げんとしてその機會のなかつた皇室に對する素朴敬虔な忠誠の至情でありまして、それが勝世の口を借りて、かくも巧みに表現することが出来たのであります。勝世は眞潮の門人で泰山學統の一人であります。明治維新を溯ること三十年三百諸侯一人として大義名分の何たるを知らぬ時代に在りまして薩土兩藩には既に國体に目醒めた皇國精神が斯くも旺盛に活躍して居たことを理解致しますと同時に此の小さい物語りが明治維新史の前曲の一挿話として興味津津たるを感ずるのであります。

私はこれを以て今夕の光榮ある御進講を終了いたします。

昭和十年十一月二日印刷  
昭和十年十一月十二日發行

發行人

高知縣學務部

印刷所

高知市帶屋町

高知縣印刷所

印刷人

高知市潮江新田三、四七七

窪田時正

356

642

終